

2019. 6. 17

畑 啓之

火災後に初となるミサがノートルダム寺院で執り行われる

この世界の全ての場所に満ち満てる主よ。私たちはいつも主との対話を持っています。そして、今日はこのノートルダムで主と対話できる喜びを、以前にもまして感じているところです。

ヘルメット？ 主はなぜヘルメットをかぶっているのかとお聞きのことと思います。私たちは決して主を疑っているわけではないのです。決して。

私たちがヘルメットをかぶらないと、報道陣もヘルメットをかぶらず、この聖堂でのミサが実施できなかったのがその理由です。

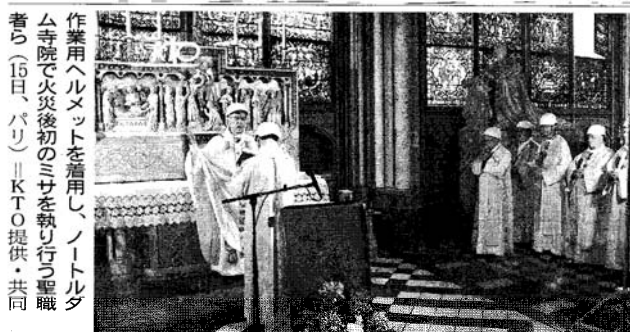
私たちは主の深い愛情の中でいつも生き、そして生かされています。そんな私たちが父であるあなたの愛情を疑うはずはありません。ましてや、主が私たちを故意に傷つけるなどと言うことは、全く思ってもみないことです。

私たちはこの聖堂でミサを行いたかった。しかし、それにはヘルメットをかぶらなければならないこと、一般信者を同席させてはならないこと、さらに、報道陣を参加させ国の威信が健在であることを広く世界に知らしめること、これらの条件が付きましました。

私たちは主の愛の中に生き、その愛を信じて疑っていません。しかし、以上のような条件下、どうしてもミサを行いたく、心ならずもヘルメットを着用することになったのです。

非常に近い将来において、神さまの住まいであるこの教会を、元よりももっと素晴らしいものとするを誓って、心ならずも本日のヘルメットでのミサとなりました。

日本経済新聞 2019.6.17



作業用ヘルメットを適用し、ノートルダム寺院で火災後初のミサを執り行う聖職者ら（16日、パリ）―KTO提供・共同

ノートルダム寺院 火災後初のミサ

【パリ共同】パリ中心部の世界遺産ノートルダム寺院（大聖堂）で、4月の大火災から2カ月となる15日、火災後初のミサが執り行われ、オプティ・パリ大司教は「大聖堂は今も生きている」と世界に訴えた。安全上の理由で参加者は聖職者ら約30人に限定された。

ミサは、被害を免れた小聖堂で行われた。建物の保全作業は続いており、参加者は全員作業用ヘルメットを着用してミサに臨んだ。カトリック系の放送局がテレビとインターネットで生中継した。終了後、オプティ大司教は記者会見で「感動的で、希望を感じさせる時間だった」と述べた。